

[特別活動]

小学校1年生における主体性を高める生活当番活動の実践

- 児童が潜在的にもつ主体性を引き出し、高めるための工夫 -

相田 祥和*

1 問題の所在と目的

学校教育においては、これからの変化の激しい社会の中で子どもたちが生き抜くために、自ら考え、判断し、責任をもって行動する「主体性」を育てることが大切であるとされている。

しかし、小学校1年生においてはどうかであろうか。松村(2018)は、「小学校に入ると1番下の学年だからという理由で「何もできない存在である」「できることはとても限られており、教師や上学年が何でも教えてあげないといけない」という認識をもたれがちである。」と述べているように、過度な心配をし、先回りをして何でも支援をしてしまう現状があると考えられる。筆者は、これまで2年間、異学年交流活動を担当する中で1年生とかかわってきた。だが、1年生は初めての体験ばかりだから、一つ一つ分かるように説明しなければならないと、やはり過度に心配をして計画・準備をすることで、1年生の主体性を奪ってしまっていた。

筆者は今年度、1年生の担任をしている。4月当初は上記のようなイメージをもっていただけ、児童の姿を見ると、できることはやってみたい、新しいことに挑戦したいという意欲が非常に強いことが感じられた。松村(前掲)は、1年生について、「自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する「資質・能力」の原石である力をそもそももっている。」としている。また、池田(2021)の研究によると、「児童の主体的な行動を誘発するのは、教師が児童にかかわりすぎず、児童を信頼して委ねる場面を多く設けることであり、教師の我慢が非常に重要である。」としている。そこで、小学校1年生だからといって教師が主となって児童を引っ張っていくのではなく、児童が自分たちで考えて、活動できる環境作りをすることで、潜在的にもつ主体性を引き出し、高めることができると考える。

本研究は、児童が就学前から幼稚園や保育園などで行ってきている当番活動を基に考える。大庭(2011)は、当番活動を行うにあたって図1のようなサイクルで行うことで、よりよい方法が確立され活動意欲の高まりや人間関係の改善が期待できるとされている。そこで、1年生の生活当番活動において、大庭の当番活動のサイクルを担当学級の実態に合わせて再編する。そして、再編した取組が、児童が潜在的にもつ主体性を引き出し、高めるために有効であるかを検証することを目的とする。

2 研究の方法

(1) 実施期間

令和3年5月から令和3年9月

(2) 実施対象

第1年生X組 27名(男子12名、女子15名)

(3) 対象児童の実態

対象児童は5つの保育園、1つの幼稚園、1つのこども園からそれぞれ進学しており、4月当初は同じ園の児童と遊

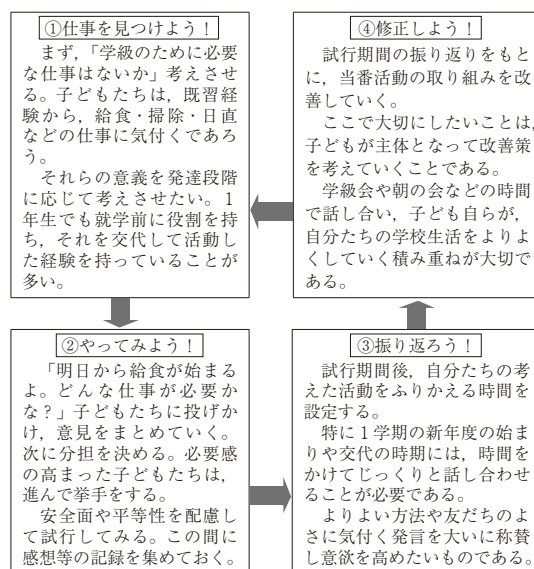


図1 当番活動のサイクル

*新潟市立白根小学校

- 幼稚園の時は、連絡帳をみんなに配っていたけれど、小学校でもできそうだ。
 ○保育園の時はご飯の前に机を拭くのを手伝っていたよ。
 ○朝の会の日直は幼稚園でもやっていたし、小学校でもやっているね。
 ○お布団敷きの仕事は小学校では必要ないけれど、他に新しくできそうな仕事がありそう。

前述の活動後から、1週間をかけて「あったらいいなこんな当番」と題して、学校生活を送る上で必要な当番を探した。

(図3) 授業中や、休み時間に児童が気付いたことをその都度共有し、掲示をしていくことで、学級をよりよくするためにどうしたらよいかを考えられるようにした。表1は、当番活動ができた経緯と内容の一部をまとめたものである。

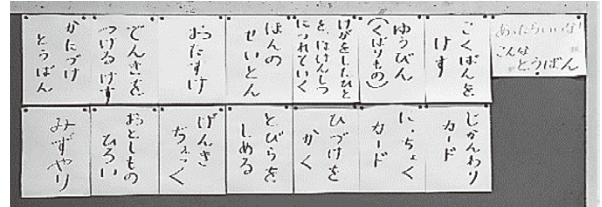


図3 児童から出てきた当番の一覧

表1 当番活動ができた経緯 (一部)

当番	設置の経緯 (児童の声)	活動内容
時間割	今日どんな勉強をするのか、分かるようにしたいな。隣のクラスではカードを貼っていたよ。	朝学習までに教室後方の黒板に時間割をつくる。(教科名が入ったカードは教師が用意)
黒板の字を消す	先生がやっているのを見て、楽しそうだからやってみたいな。	休み時間になったら黒板の字を消す。
かたづけ	図工の時間の後にごみをほうきで取ったらきれいになったし、みんなに褒められて気持ち良かった。もっとやりたい。	ごみが落ちていたら拾う。図工の後にほうきで掃除をする。

活動の結果、就学前からやってきて小学校でもできそうな当番、学級をよりよくするために必要な当番が、合わせて14個出された。このことから、教師が予め当番を設置しなくても、就学前の経験を思い出しながら考えることで、児童は自分たちで学級に必要な当番に気付くことができることが明らかとなった。

(2) お試し期間の設定

学校生活を送る上で必要な当番を集めた後、児童にどの当番をやりたいか話を聞くと、1つだけではなく、複数やりたいと答える児童が多かった。一方で、「どんな仕事をするのか、今まで幼稚園や保育園でもやったことがないからよく分からない。」という声も聞かれた。そこで、当番活動を開始するにあたって約1か月間の「お試し期間」を設けた。これは、児童がやってみたい当番を5つ挙げ、3日間ずつ体験することを通してどれが自分に合っているのか、やりがいを感じられるのかを確かめることで、当番活動への意欲を高めることを目的とした。当番によっては、希望する児童数が多いものもあったため、教師が一役を複数人で担当できるよう、事前にアンケートを取り、割り振った。表2は、抽出児童2名が選んだ当番活動の一覧とお試し期間後の振り返りである。

表2 A児とB児が選んだ当番活動の一覧

	5/24. 25. 26	5/27. 28. 31	6/1. 2. 3	6/4. 7. 8	6/9. 10. 11
A児	黒板の字を消す	本の整頓	元気チェック	花の水やり	時間割を書く
B児	黒板の字を消す	元気チェック	落とし物を拾う	扉、窓の開け閉め	電気をつける

○A児：私は、お花の水やり当番をやりたいです。お世話をしてみて、お花が好きだし、元気になるといいなと思ったからです。(→6月からはお試し期間に選んでいた水やり当番を選択)

○B児：色々やってみてどんなことをするのは分かったけれど、元気チェック当番は、健康観察板を取りに職員室に入るのが緊張するし、やりたくないな。(→6月からはお試し期間に選んでいない水やり当番を選択)

お試し期間中は、今日はどの当番をするのかなとワクワクして過ごす様子が見られた。そして、様々な当番を体験することで、役割をもって活動することのよさや楽しさを感じる声がよく聞かれた。お試し期間後、27人中17人(62.9%)の児童が、お試し期間中にやりたい当番を見付け、お試し期間と同様の当番活動を6月以降に行っていた。また、お試し期間中と別の当番を選んだ児童の多くが、周りの友達がやる当番の姿を見て、真似をしたくなって選んだと話していた。振り返りの記述からは、お試し期間を通して、A児は自分が特に好きな当番を見付け、選択したことが読み取れる。一方で、B児のようにお試し期間を通して自分には合わない当番だと感じている児童も見られた。そう

いった児童に対しては、本人たちのこれまでの取組を否定するのではなく、「苦手な当番ではなく、自分がやっていて楽しい当番がきっと見つかるよ。」などと励ましの言葉を掛けることを意識した。

(3) 当番活動の実施、個々の達成感を感じられる当番カードを活用しての振り返り

お試し期間を終えて、6月中旬から正式に当番活動を開始した。初めにそれぞれがやりたい当番活動を選び、希望する児童の人数によっては一役を複数人で担当することも可とした。また、希望者がでなかった当番については、学級に必要であるかを再度問い、必要であるという声が多い場合は、やりたい児童が複数の当番を兼任してもよいという形を取った。

筆者は前年度までの3年間でも当番活動をクラスに設置していたが、その際は仕事が終わったら教室後方にある当番名が書かれた短冊カードを裏返して、活動終了の合図を出すようにしていた。確認が簡単であり、クラス全体で仕事を取り組んだかどうか共有できることが利点であった。一方で、日々同じ短冊カードを裏返してしまうために当番活動をどれだけ継続してできたのかが分かりにくいこと、短冊カードがクラス全体から見られることで当番活動をやっ

ていない児童が周りから見て明らかになってしまうことの2つが欠点であった。そこで、独自の手立てとして、本研究では児童1人1人に「当番カード」(図4)を配布し、当番活動を終えたら担任の元にシールを取りに来ることとした。この取組によって、児童が視覚的に、積み重ねて頑張ってきたことを認識できるようになった。多くの児童が当番を終えてシールが溜まっていくことに喜びを感じ、自分から進んで当番をする様子が見られた。そして、教師側からは個々の活動状況が確認でき、当番活動が出来ていない児童には「今日の朝、一緒に当番をしてみようか。」などと、個別に声を掛け励ましたり、手伝ったりという対応ができた。

しかし、活動を進めていく中で、B児を含む数名の当番活動が上手くいっていない様子が顕著に見られた。そこで、それぞれの悩みを、普段から国語や算数のグループワークにて一緒に活動している生活班で聞き合う時間を設けた。以下はB児のいるグループの発話記録である。

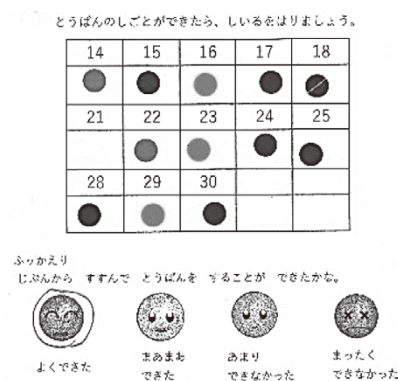


図4 当番カード

B児：今やっている（水やり）当番があまり楽しくないよ。

A児：私は、水やり当番楽しかったよ。友だちと一緒に水くみに行って、お花に水をあげると自分も気持ちがいいし。

B児：そうかなあ。毎日朝1回しか水をあげられないし。もっとやりたかった。

C児：僕がやった健康観察板を職員室に取りに行く当番は、職員室で他の先生とも喋れるし楽しいよ。どう？

B児：私は緊張しちゃうし、喋るのが苦手だからいやだな。

D児：そうしたら、郵便当番（配りもの）がおすすめだよ。何回もできるし、緊張もしないからいいよ。次一緒にやろうよ。

B児：わかった。やってみようかな。

このやり取りから、B児に主体性が備わっていないことが原因ではなく、活躍できる回数の不足や、過度な注目を集めるような活動が苦手であるという要因が、B児が潜在的にもつ主体性を発揮できない理由となっていたと考えられる。そして、B児は否定したもの、A児や他の児童はそれぞれやってきた当番に肯定的であることから、児童によってやりがいを感じられる当番とそうでない当番が異なるのであり、より自分に合った当番を選択することが重要であることが改めて確認できた。B児は、この活動後の振り返りに以下のように答えている。

最初は当番の仕事が楽しくないなって思っていたけど、みんながやりたい当番を選んでやっていて、いいなって思った。今回は上手いかなかったけど、次は郵便当番をやりたいし、当番カードにシールが全部貼れるように頑張りたい。

この話合いの後、B児は郵便当番を選び、活動を開始している。教師が他の当番活動をすることを提案するよりも、児童同士で話し合い、それぞれの当番の良さを伝えることで、より納得している様子であった。その後教師側からは、児童の見守りや「今日もありがとう。～が助かったよ。」等と児童の頑張りを具体的・継続的に褒めることを意識した。

(4) 活動の修正, 引き継ぎ

前年度までも、当番毎に活動の振り返りをしていていたが、次の当番に変わった時に当番の必要感や活動内容がよく伝わってなく、活動が停滞する様子が見られていた。そこで、児童が主体となって一層当番活動に取り組めるよう、活動の引き継ぎを右のようなワークシート（図5）を活用して実施した。同じ当番であった児童同士で集まり、話し合った結果をワークシートに記入し、全体共有を図った。水やり当番であったA児は、自分の当番をする上で気を付けること、大事なことを、図5のように記入・発表をした。一方、B児もA児と同じ水やり当番として話し合いに参加し、「お花の世話が好きな人がおすすめだよ。」と、自分の経験を基に話していた。他にも以下のような記述が見られた。

図5 ワークシート

- 時間割当番：教科カードを間違えないように、予定表をよく見て貼ってね。新しく当番になった人に時間割当番の仕事を教えてあげるね。
- 元気チェック当番：職員室に入るときに「失礼します。健康観察板を取りに来ました。」と挨拶するよ。同じ当番の人と声を掛け合って一緒に行くことと安心するよ。

これらの記述から、児童が当番活動に責任をもって取り組むことで、主体性を発揮できていたと読み取れる。また、1人で当番活動をするのではなく、周りの児童と協働することのよさを感じている様子であった。そして、翌日には新しく当番になった児童に自分からどんな活動をするのか、教師の指示がなくても自主的に教えに行っている様子が見られた。このことから、1年生であっても継続して取り組んだ当番活動に責任感や自信を感じており、教師がかかわりすぎなくても、児童の声を聞き、児童の気付きに繋がる支援をすることで、児童が主体性をもって活動を進めていけることが明らかとなった。



図6 引き継ぎをする様子

4 考察

(1) 研究の成果

当番活動の取組状況、活動後の児童の姿の2点から、再編した当番活動のサイクルが、児童が潜在的にもつ主体性を引き出し、高めるために有効であったかどうかを考察する。

① 当番活動の取組状況から

表3は、6月、7月、9月の当番カードから読み取れる結果である。

表3 当番カードから読み取れる結果

調査項目	6月（全13日間）	7月（全15日間）	9月（全13日間）
活動に取り組んだ日数の平均	10.2日（78.4%）	12.0日（80.0%）	11.5日（88.4%）
「自分から進んで当番をすることができたかな。」の問いに対して肯定的な回答の割合（よくできた、まあまあできた）	22人	23人	25人

表3の変化を比較分析すると、活動に取り組んだ日数平均の割合は、月を追うごとに増加している。また、「自分から進んで当番をすることができたかな。」の問いに対しても人数の増加が見られる。初めは当番活動に対して不安を抱いていた児童も、活動を通して自分に合った、もしくはよりやりがいを感じられる当番を見付け、継続できたことが数値の増加の要因であると考えられる。また、活動停滞時でも児童なりの気付き等による取組の立て直しも要因と言える。

そして、児童が活動に慣れてくると、さらに主体性が高まっていると感じさせる姿が現れてきた。具体的には、本の整頓当番が本の背表紙が揃うように片付けの仕方と呼び掛けたり、電気当番が引き継ぎ時に電気のスイッチにシールを貼って誰でも分かりやすいようにしたりといった児童自身の考えによる行動が挙げられる。教師側から先回りした過度

な支援がなくても、自己選択の機会を与えることで、児童は自分たちで主体性を発揮し、活動することができていた。よって、再編した当番活動のサイクルが、児童が潜在的にもつ主体性を引き出し、高めるために有効であったと言える。

② 活動後の児童の姿から

以下は、9月の活動後の抽出児童2名の振り返りである。

- A児：色々な当番をやってみたけれど、どの当番も楽しかったし頑張れた。また同じ当番もやりたいし、違う当番もやってみたい。
- B児：最初は、当番は大変そうで嫌だと思っていたけど、7月からの郵便当番は、友だちとプリントとかを配れて楽しかったし、みんなに「はいどうぞ」って配ったら、たくさん「ありがとう」を言ってもらえて嬉しかった。

A児は、6月から9月の当番で、水やり当番→郵便当番→電気当番の3つの当番を担当し、どの当番も毎日欠かさず行っていた。また、活動を通して主体的に動き、当番の引き継ぎ活動や話し合い活動にも積極的な参加が見られた。B児は、話し合い活動を通して、プリント類を配る郵便当番を次の当番活動に選択し、7月、9月と取り組んでいた。6月はやりがいを感じられず思うように活動できていない様子だったが、7月からは自分で選んだ当番にやりがいを見付け、取り組めたことが振り返りから推測される。よって両者は、活動開始時に当番活動に対しての意欲に違いはあったものの、本実践を通して当番活動にやりがいを感じ、潜在的にもつ主体性を発揮し、高めることができたと言える。そして、9月の活動後にとった学級アンケートの結果は以下の通りである。

表4 9月に実施した学級アンケートの結果

Q1 当番活動は好きですか。	とても好き	まあまあ好き	あまり好きではない	全く好きではない
	18人	7人	2人	0人
Q2 当番活動をして先生や友達に褒められたりして、嬉しいと思うことがよくありますか。	よくある	たまにある	あまりない	全くない
	14人	9人	4人	0人
Q3 自分は当番活動で学級の友達の役に立っていると感じますか。	よく感じる	まあまあ感じる	あまり感じない	全く感じない
	13人	10人	4人	0人

学級全体の結果を見ても、多くの児童が当番活動に肯定的感情を抱いていることが言える。また、Q2、Q3の回答から、多数が当番活動を通して周りから認められていると実感できていることが確認できた。そして、当番活動を重ねていくことで、児童同士の関係性が強くなり、誰かが失敗をしても進んで助け合って活動する姿が多く見られるようになった。以上のことより、児童が自分たちで考えて、活動できる環境作りをすることで、児童は学級や当番活動での取組に安心感や自信をもち、潜在的にもつ主体性を引き出し、高めることができると言える。

(2) 研究の課題

本研究は、5月中旬から9月中旬までの短い期間の実践を分析した。そのため、長期に亘って当番活動を続け、子どもたちの主体性が高まったのかを検討する必要がある。また、今回の結果は1年生の一学級においてのみ確認されたことであり、他学級でも同じ結果が得られるか検証が必要である。そして、本実践を通してまだ当番活動を主体的に行えていない児童が複数いるため、彼らの主体性を引き出し高めていけるよう、今後さらに研究を深めていきたい。

5 引用・参考文献

- 池田健二『児童が主体的に動く学級経営の在り方ープロジェクト活動の実践を中核としてー』、教育実践研究、第31集、2021年、181～186 pp
- 大庭正美「当番活動・係活動指導の急所 子どもがハマる手立て」『学級生活指導の基礎スキル2』、明治図書、2011年、33～41 pp
- 渋谷真理、金倉美由希、橋本恭子『当番活動が子どもに与える影響ー異なる年齢間の比較を通してー』、日本保育学会大会研究論文集52、1999年、52～53 pp
- 松村英二『学びに向かって突き進む！1年生を育てる』、東洋館出版社、2018年、10～29 pp